



田沼街道とまぼろしの城

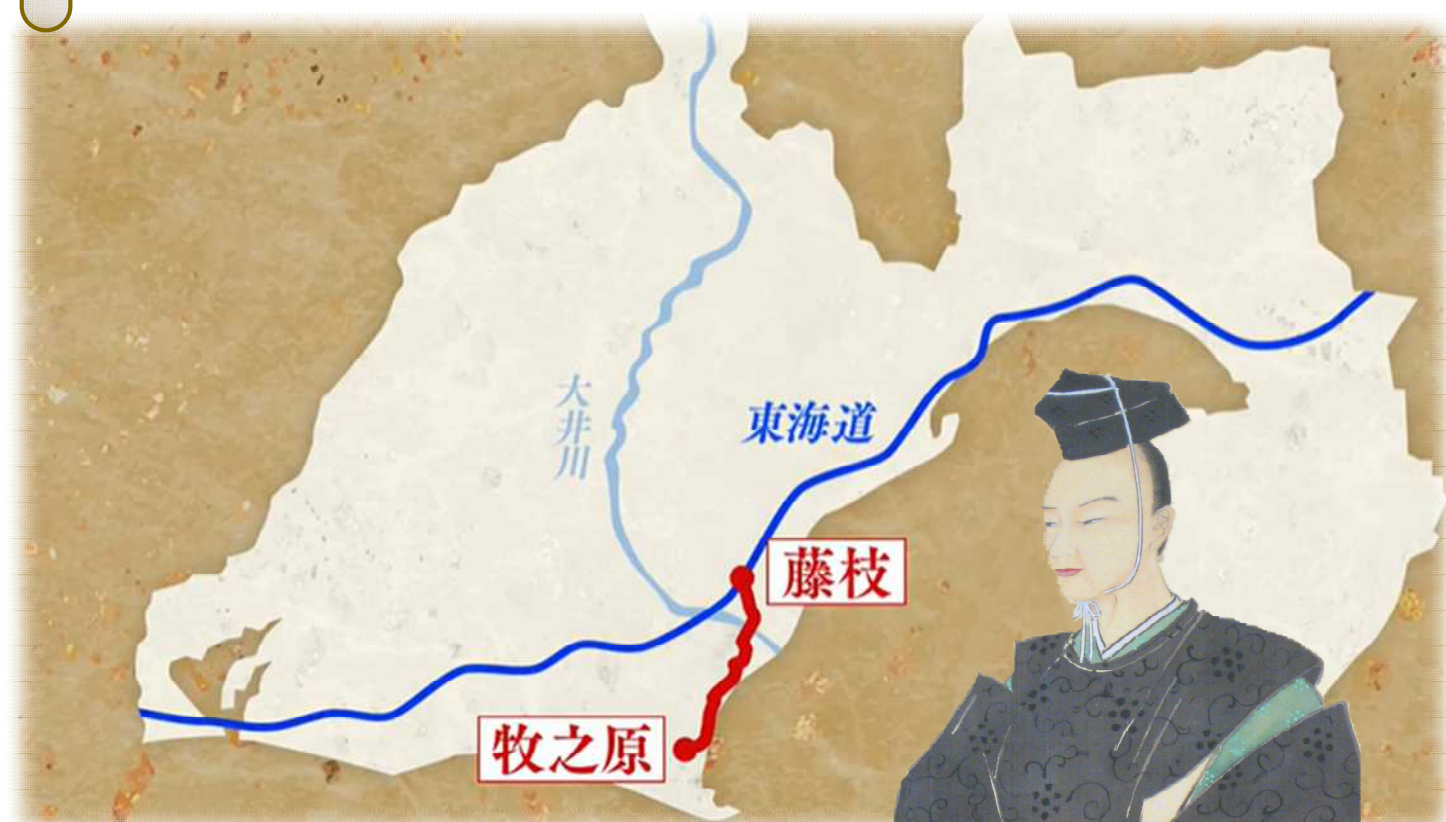
ストーリーの概要

相良城から東海道藤枝宿に至る街道は、「田沼街道」と呼ばれる。

その名は、江戸時代の老中「田沼意次」に由来する。賄賂のイメージが強いが、その実は「またうどのもの(正直で律儀な人)」と将軍に評された為政家であった。

意次の手腕は領国経営にも活かされたが、失脚によりこの地を去る。居城相良城は、わずか8年間のみの幻の城となった。

しかし、意次の功績は、人々の記憶に残った。意次が通った道は、大井川の新たな渡河場となり、地域の流通を活性化させた。この道を、意次を慕う人々がいつしか呼ぶようになった名が「田沼街道」である。



トピック

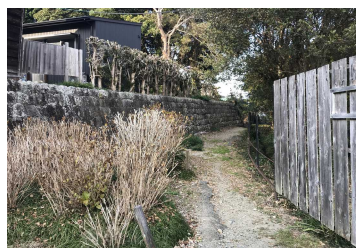
街道と相良の殿様



相良城址に立つ城主意次像
(牧之原市)

- 東西交通の大動脈である東海道五十三次の一つ藤枝宿から分岐する南へ向かう街道「田沼街道」。
- その名の由来は、江戸幕府の老中を務め、相良藩主であった田沼意次である。
- 「賄賂」のイメージが付きまとう意次であるが、将軍には「またうどのもの(正直で律儀な人物)」と評された人物であった。

意次と田沼街道



大鐘家付近(牧之原市)
の田沼街道

- 意次が相良藩主となった当時、島田宿一金谷宿間のみが大井川越えの公認ルートであり、東海道から相良へ至るには、牧之原台地を越えなければならなかった。
- 意次は、相良城から江戸に向かう際、海沿いを進み藤枝宿に至った。
- 意次が通った道は、地域の流通に活性化をもたらし、いつしか「田沼街道」と呼ばれるようになった。

まぼろしの「相良城」



「遠江国相良城図」 提供/聖心女子大学図書館

- 意次は、明和5年(1768)に相良城の築城に着手。
- しかし、その8年後の天明6年(1786)に意次が失脚すると破却された。近世では、日本一短命な城であった。
- 相良城の破却は徹底的に行われたが、意次を慕う人々により、建物の一部は、領内や街道沿いの寺院に移された。
- 相良城築城とともに整備された相良の町割りも、現在の地割に踏襲されている。

意次の足跡



田沼意次侯顕彰銘菓「二朱銀」
・田沼時代に発行された「南鐐二朱銀」にちなんだ商品

- 意次の政治手腕は、領国経営にも発揮された。特産品の生産奨励に加え、相良の湊を整備し、海上交易の活性化も促した。
- 牧之原市に伝わる「御船神事」は、相良湊の廻船問屋による海上安全・商売繁盛に端を発する行事である。
- 意次は現在のまちの礎を築いた名君であり、地元では田沼家を慕う人々により、意次関連の名物開発や顕彰事業が盛んに行われている。

相良城主田沼の足跡を伝える構成資産

- 田沼意次の居城相良城と、田沼の名を冠する街道沿いの4市町(牧之原市、藤枝市、焼津市、吉田町)に所在する23件の文化財が構成資産

その評、「またうどのもの」

- 藤枝と相良を結ぶ「田沼街道」の名は、相良城主であった田沼意次に由来する
- 徳川幕府9代・10代将軍に仕えた田沼意次。「賄賂」のイメージが強いが、将軍には「またうどのもの(正直で律儀な人物)」と評された



田沼時代に発行された「南鐐二朱銀」
貨幣の全国統一も意次の政策

- 意次の政策は、商業の発展や流通の促進により、経済の活性化を目指すものであった
- 近代化の先駆けとも言える意次の政策は、人々の生活にゆとりをもたらし、新たな芸術や文化が花開く時代となった

構成資産 1 ～相良城エリア～

- 宝暦8年(1758)、相良藩一万石の大名となった意次は、明和5年(1768)に相良城の築城に着手
- 安永9年(1780)には、完成した相良城と領内の見分のため、お国入りを果たす

たぬまおきつぐぞう

①田沼意次像 牧之原市相良

- 牧之原市史料館が所蔵する田沼意次の肖像画
- 描かれているのは、相良藩主となっていた40代の姿
- 意次は将棋を嗜み、領国の相良藩でも将棋が盛んとなった



牧之原市の旧家からは、領民が作った約200年前の詰将棋が発見されている

さがらじょうし

②相良城址 牧之原市相良

- 田沼意次の居城・相良城の跡地は、現在も相良の中心地である
- 城下は、江戸時代後期の僧侶である横井金谷の『金谷上人一代記』にて「富商大家あり」「大湊」と形容されるほど繁栄した





さがらじょうに まる まつ
③相良城二の丸のマツ 牧之原市相良

《市指定天然記念物》

- 相良城二の丸跡の土塁に生育するマツ
- 現在、二の丸跡には相良小学校が建っている



せんたいがし
④仙台河岸 牧之原市相良

《市指定史跡》

- 相良城外堀の石垣
- 城内と相良湊を繋ぐ船着場の跡で、仙台藩主・伊達家寄進の石材で築かれたと言われる



くぎがうらしょそんえす
⑤釘ヶ浦諸村絵図 牧之原市相良

- 「田沼街道」の名が記された天保13年(1842)の古絵図
- 牧之原市史料館で写しを公開



さがら ねあが まつ
⑥相良の根上りマツ 牧之原市相良

《県指定天然記念物》

- 相良城下を守っていた防風・防潮林の名残
- 江戸時代後期には根が地上高くに表出していたと言い、当時の相良城下の景観を現在に伝える

牧之原市史料館

田沼意次・意知親子や相良藩ゆかりの史料等、200点以上を展示
 時:9:00~16:00 休:月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
 料:大人 220 円、18歳未満110円



お城のような外観



意次が神社に寄進したという神輿が出迎える

構成資産 2 ～相良城周辺エリア～

- 天明6年(1786)に意次が失脚すると、相良城は破却された。完成からわずか8年、近世で日本一短命な城であった
- 往時のものの多くは失われてしまったが、建物の一部等は、意次を慕う人々により散逸を免れ、領内や街道沿いの寺院に転用された



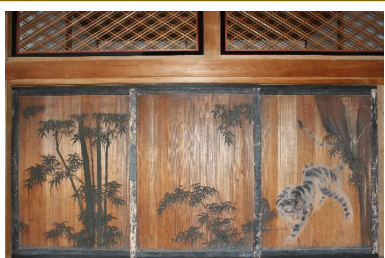
だいたくじ ほんどう

⑦大澤寺本堂 牧之原市波津

《市指定有形文化財》



- 寛政3年(1791)の建立
- 相良城の木材を転用したとされ、本堂の床下に痕跡が残る



はんにゃじ さがらじょうすぎと

⑧般若寺の相良城杉戸 牧之原市大沢

《市指定有形文化財》

- 虎や鳳凰が描かれた狩野派による杉戸絵
- 相良城本丸御殿のものという。地元の人々が守り伝えた田沼家ゆかりの宝物の一つ



じんたいこ

⑨陣太鼓 牧之原市大沢

《市指定有形文化財》

- 般若寺に伝わる田沼家の家紋入りの太鼓
- 相良に海賊が襲来したとき、この陣太鼓を打ち鳴らし撃退したという伝説を持つ
- 大正時代、中に金塊があるという噂を信じた盗賊が切った傷が残る



じょうしん じ さんもん てらだどうせんさくりゅう ちょうこく

⑩浄心寺山門の寺田洞仙作龍の彫刻

《市指定有形文化財》

牧之原市福岡

- 田沼領となった地域の文化を伝える作品
- 寺田洞仙は、田沼時代に活躍した狩野派の郷土画人。相良藩の御用絵師ともいう



へいでん じ ほんどう

⑪平田寺本堂 牧之原市大江

《市指定有形文化財》

- 意次が手厚く保護した領内の寺社の一つ
- 天明6年(1786)に意次が建立した本堂は、田沼家専用の玄関を備える



田沼家専用玄関



再建された意知供養碑

- 境内には、意次の嫡男・意知の供養碑もある

意次が通った道「田沼街道」

- 当時、「越すに越されぬ」と詠われた大井川を越える公式なルートは、島田宿と金谷宿の間であった
- 意次も領国入りの際には、島田で大井川を渡り、牧之原台地を越えて向かっているが、相良城から江戸に向かう際は、小山（現吉田町）-相川（現焼津市）間で大井川を渡り、藤枝宿に至った
- 意次が通った道は、その後、地域の流通活性化と街道沿いの産業振興をもたらし、意次の死後、地元の人々により「田沼街道」と呼ばれるようになっていた

構成資産 3 ～田沼街道と牧之原・吉田エリア～



みなとばし たぬまかいどうさがらわきてん

⑫ 湊橋（田沼街道相良側起点） 牧之原市大江

- 田沼街道は、萩間川に架かる湊橋を起点とした
- 近くの大和神社そばには、市民が建てた起点の碑がある

起点の石碑から藤枝宿方向を望む



おおがね け じゅうたく

⑬ 大鐘家住宅 牧之原市片浜

《国重要文化財》

- 主屋は 18 世紀初期、長屋門は安永 10 年（1781）の建築
- 目の前を田沼街道が通り、当時の景観を伝える

時:9:00～17:00（入館 16:30 まで） 休:1/1～1/3
料:大人 400～700 円、こども 200～400 円
問:0548-52-4277



さんちょうめ どうりょう

⑭ 三丁目の道標 牧之原市静波

《市指定史跡》

- 田沼街道に建てられた道標、天保7年（1836）の建立
- 「かけ川道」「大井川道」「さがら道」と刻まれている



のうまんじ そてつ

⑮ 能満寺のソテツ 吉田町片岡

《国指定天然記念物》

- 意次は、安永 9 年（1780）のお国入りの際、能満寺で休憩をとった
- 能満寺のソテツは、樹齢 1000 年と言われる

構成資産 4 ～田沼街道と藤枝・焼津エリア～



たぬ まかいどうし も せごえあと

⑯田沼街道下瀬越跡 焼津市西島・相川

- 田沼街道における大井川越えの経路跡(左岸)
- 国道 150 号富士見橋の上流側付近にあたる

焼津側から大井川方向を望む



かちくさばし たぬ まかいどうふじえだがわきてん

⑰勝草橋(田沼街道藤枝側起点) 藤枝市志太 4 丁目

- 藤枝宿の西木戸を出て瀬戸川を渡った袂から、田沼街道が分岐した
- 現在は瀬戸川に勝草橋が架かるが、田沼の時代には橋はなく、徒渡りであった



だいけいじくり

⑱大慶寺庫裡 藤枝市藤枝4丁目



- 相良城の破却後、売却された部材を転用したと伝わる
 - 柱や梁、欄間の一部が当時のものという
- 建物内は通常非公開



おかべながちかほうのう え ま

⑲岡部長慎奉納絵馬 藤枝市若王子

《市指定有形文化財》

- 相良城の接收役を務めたのは、岸和田藩主の岡部氏であった
- 岡部氏が、無事接收役を務められたことを感謝して岡部町の若宮八幡宮に奉納した絵馬
- 現在は藤枝市郷土博物館で保管し、特別展等で公開している



さがらじょうち かみ いしとびら

⑳相良城地の神の石扉 焼津市東小川5丁目

- 相良城本丸に祀られていた地の神の社の扉と伝わる
- 船問屋岡部屋から教念寺へ寄進された

- 相良は古くから「塩の道」の起点であり、意次は、塩の生産も奨励した。
- 「塩の道」は、しずおか遺産「秋葉信仰と街道」にて紹介

【しずおか遺産「秋葉信仰と街道」の概要】

- 江戸時代、全国から火伏の御利益を求め秋葉神社を目指した人々が通った「秋葉街道」沿いの文化財 48 件を紹介するストーリー



塩の道起点(牧之原市)

構成資産 5 ～意次ゆかりの歴史遺産～

- 意次は、特産品の生産を奨励するとともに、相良湊を整備することで地域経済の発展を促した。その名残は、伝統行事や郷土の食に残されている
- 領内で産出された石灰や塩、海草のサガラメ、梅干、鰹節、茶等が、意次によって整備された湊から、海路で江戸に運ばれた
- 牧之原市内の神社で行われる「御船神事」は、相良湊の廻船問屋による海上安全・商売繁盛に端を発する
- 郷土料理「めまき」（鰹をサガラメで巻いて煮たもの）や鰯の塩漬け、小魚の梅酢漬け等も、領内で育成された産業の賜物である



てんじんやまお か み せ っ かい がん
②①天神山男神石灰岩

牧之原市男神

《県指定天然記念物》



漆喰の材料となった石灰

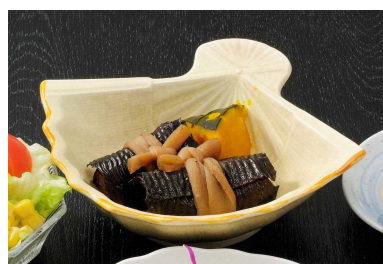
- 県内では珍しい石灰岩の山
- ここから採れる石灰は、地域の特産品として相良湊から江戸に運ばれ、江戸の建物で漆喰として使われた



おふねしんじ
②②御船神事 牧之原市内

《国重要無形民俗文化財ほか》

- 海運業の繁栄を伝える神事
- 市内4カ所の神社で行われる
 - ・大江八幡神社の御船行事:国重要無形民俗文化財
 - ・飯津佐和乃神社の御船行事:県指定無形民俗文化財
 - ・鹿島神社と神明神社のお船神事:市指定無形民俗文化財



さ が ら じ ょ う か き ょ う どり ょ う り
②③相良城下の郷土料理 牧之原市

- 鰯の塩漬けや小魚の梅酢漬け、鰹をサガラメで巻いて煮た「めまき」等の素材は、意次が奨励した産業とも関連

郷土料理の「めまき」

- この地域にとって、意次は一帯を活性化させた名君である。現在も慕う人々により、田沼家に因む名物開発や顕彰事業が行われている。
- 意次が残した文化と遺志に触れる「田沼街道」。この道を辿り、城下をまわれば、意次が起こした新たな風の余韻を感じるだろう。

「田沼街道とまぼろしの城」のストーリー

○もう一つの東西街道

東西交通の大動脈である東海道は、京に向かい江戸を発ち、駿府を過ぎると暫時、山あいを行く。駿府から西に向かう街道は、東海道の他にも海沿いを行く道がある。その一部は、いつしか「田沼街道」と呼ばれるようになった。

「田沼街道」は、東海道の藤枝宿と東遠江の城下町・港町である相良を結ぶ道だ。街道は、多くが目的地や経由地を名に冠するが、この街道は人名に由来する。江戸幕府の老中を務め、相良藩主であった田沼意次である。

○「またうどのもの」

徳川幕府9代・10代将軍に仕え、史上唯一の老中兼側用人だった田沼意次。「賄賂」のイメージが巷間に流布するが、その実は「またうどのもの（正直で律儀な人物）」と将軍に評された為政家である。

意次の政策は、それまでの米中心の経済とは異なり、商工業の発展や流通の促進による経済の活性化を目指すものであった。

近代化の先駆けとも言える政策の展開は、人々の生活にゆとりをもたらし、田沼時代と称される芸術・文化の花開いた新時代を生み出した。

○相良の殿様と「田沼街道」

宝暦8年(1758)、相良藩一万石の大名となった意次は、明和5年(1768)に相良城の築城に着手。安永9年(1780)には、完成した相良城と領内の見分のため、生涯唯一となる領国へのお国入りを果たすが、天明6年(1786)に失脚すると、相良城は破却され、田沼家は相良の地を去る。

転封に伴い城と共に多くの記録が失われたため、実のところ、相良藩主としての意次の事跡は不明な点が多い。「田沼街道」という名も、意次が名付けたものではなく、その在世時には、この呼び名さえなかった。

しかし、天保13年(1842)の古絵図には、その名が記されている。意次の死去から時を経ずして、この地の人々が自ずと呼んだ名が一般名称として浸透していた。人々が過去の領主を街道名とした背景には、「越すに越されぬ」と詠まれた大井川が存在がある。

○もう一つの、大井川越え

当時、相良から陸路で江戸を目指すには、牧之原台地を北上し、唯一の川渡しの場である金谷・島田間で大井川を渡って東海道を進むのが公式ルートであった。

意次もこのルートを逆に辿り領国入りした。一方で、海沿いを進み、小山(吉田町)・相川(焼津市)間で大井川を渡り、藤枝宿に至る道もあったが、下流(下瀬)を渡ることは、御法度の非公式ルートであった。

しかし、意次は江戸への帰還時に、このルートを通り下瀬を超えた。この道こそ「田沼街道」である。幕府の重臣である意次が、このルートによる領民の往来を保証したことにより、地域の流通が活性化し、街道沿いの産業が振興した。もう一つの大井川の渡河地点を持つ「田沼街道」。その名は、意次の功績や威光を称えるために、領民や街道沿いの住民が使い始め、この地に定着した。古絵図に記された道筋は、今も辿れる部分があり、記された地名も多く残り、意次が歩んだ街道の姿を体験できる。

○幻の城「相良城」と意次の足跡

完成からわずか8年、近世で日本一短命な城となった相良城。往時のものは殆ど失われてしまったが、意次が整えた城下の町割は、現在の市街地の区画に引き継がれた。

相良城の一部は、意次を慕う人々により散逸を免れ、領内や街道沿いの寺院に奉納された。断片的に残る石垣や土塁、移された建築部材や調度品、城下の面影を伝える町割を巡り、繋いで浮かぶのは、幻の相良城の姿であろう。

意次は、領内の寺社も手厚く保護した。将棋のタイトル戦が行われる牧之原市の平田寺もその一つである。

平田寺は、田沼家歴代の御位牌を祀る香華寺として知られる。意次は将棋を嗜み、領国でも将棋が盛んとなった。牧之原市の旧家からは、領民が作った約 200 年前の詰将棋が発見されている。

○受け継がれる意次の遺産

不明な点が多い、意次の領国経営であるが、断片的に残る足跡からは、小さな港町・陣屋町だった相良は大きく変貌を遂げ、領内や街道沿いの地域も新たな時代を迎えたことがうかがえる。

意次が、特に力を入れた領内の産業が製塩である。信濃に至る「塩の道」の起点でもあった相良の海岸沿いに、塩田を作ることを奨励し、資金援助に加え、塩を年貢とすることも認めた。

陸の道だけではなく、海の道にも注目した。湊を整備することで、領内で産出された石灰、特産物である塩や海草のサガラメ、梅干、鰹節、茶等も海路で江戸に運ばれることとなった。

湊の交易は、地元の人々により引き継がれる行事となって名残を伝える。牧之原市内の神社で行われる「御船神事」は、相良湊の廻船問屋による海上安全・商売繁盛に端を発する行事である。意次が進めた流通による地域経済の発展は、伝統行事に形を変えた。

食文化にも名残がある。牧之原市には、鰯の塩漬けや小魚の梅酢漬け、鰹をサガラメで巻いて煮た“めまき”などの郷土料理があるが、これらも意次が領内の産業に尽力した賜物といえる。

地元において意次は現在のまちの礎を築いた名君である。田沼家にちなむ名物開発や顕彰事業が盛んに行われてきた。その活動は昭和 40 年代に本格化するが、その元は「田沼街道」であった。

意次が認め、意次が歩き、意次が残した文化と遺志に触れられる全国唯一の道「田沼街道」。この道を辿り、城下をまわれば、意次が起こした新たな風の余韻を感じることができるだろう。

しずおか遺産

「田沼街道とまぼろしの城」

代表連絡先

担 当 牧之原市教育文化部
大河ドラマ活用推進室 文化振興係
電 話 0548-53-2626
E-mail bunka@city.makinohara.lg.jp
住 所 〒421-0592
牧之原市相良 275